

絶海上人と大蛇の頭（桑原）

むかし、むかしのお話です。桑原の欣勝寺に絶海上人がおられました。中国に渡って仏教を学んできたえらいお坊さんです。

ある年の八月、雨の降る夜おそくのことです。上人が考え事をしてしていると、庭先に人の気配がします。

「なにやらあやしい。人の姿をしているようだが、けもの化身だな。」

と見抜きましたが、そのまま放っておくことにしました。

ところが、次の日も次の日も、夜中にやって来ては、すすり泣くのです。話を聞いてほしい様子が感じられます。

さすがの上人も七日目には根負けして

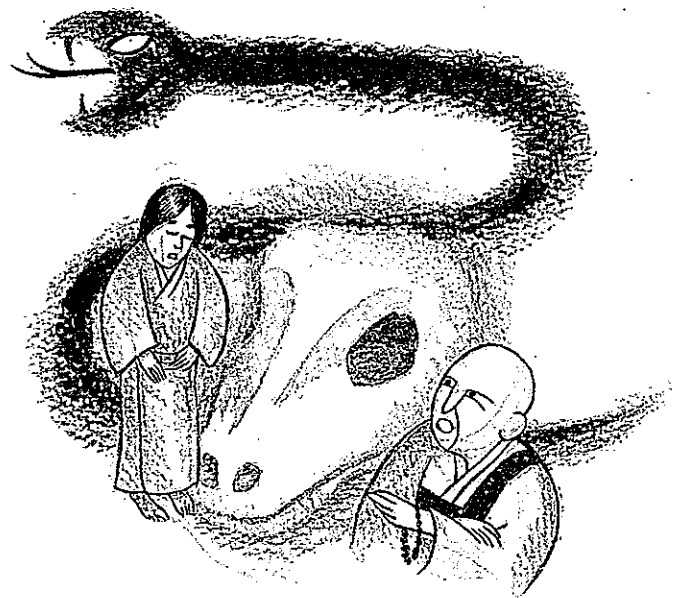
「そこにおられる方、出て来られよ。」

と声をかけました。

すると、現れたのは若い娘でした。

「よくぞ七日間もがまんされましたな。そのわけを話してみなされ。」

と、上人はやさしく言いました。



その娘は涙ながらに話しはじめました。

「私の名前はきぬと申します。丹波山里の農家のひとり娘として育ちました。十七才で、親が決めたむこ養子を迎えました。まじめな人で、親の言うことをよく聞き、一生懸命働いてくれました。幸せに暮らしていました。が、父と母が亡くなると様子が変わってきました。

働かずに町に出かけては遊ぶようになりました。お金がなくなると田畑を売りとばし、家にも帰らなくなりました。

そのうち、三田にいて好きな女の人とくらししていると

人から聞きました。その時の腹立ちようは言葉に表せないほどで、今でもはつきりと覚えています。身がよじれるほどの怒りにかられ、何の当てもなく、飛び出すように夫を探しに来たものですから、見つかるはずがありません。道に迷い、疲れ果て、どうすることもできず、裏谷の池に飛びこんでしまいました。

でも、怒りや悔しさが消えず、大蛇に生まれ変わってしまったのです。今では夫をのろう気持ちと自分の情けなさが入り乱れ、あまりの苦しさに耐えきれなくなっているのです。上人様、どうかこんな私をお助けください。」上人は、この娘の話をうなずきながら温かく見守るように聞きました。

「それはつらかったでしょう。さぞかしお悩みされたことでしょう。」

といい、おだやかな心でいることの大切さなど、娘の心に添うように話をしていきました。すると娘は、

「ありがとうございます。おかげさまで、苦しみがやわらいできました。成仏できそうです。上人様、ありがとうございます。」

お礼と言っは何ですが、私が大蛇に戻って死んだあ

と、大蛇の頭の骨を置いておいてください。そして、日照りが続いたときに、その骨を外に出してみてください。きつと雨を降らすようにいたしましょう。」とお礼を言っ、裏山へ帰って行きました。怒りや悔しさが消えた静かな後ろ姿でした。

次の日、話を聞いた村人たちは裏山をさがしました。谷間の奥まったくぼ地に三十六尋ひろもあろうかと思える大蛇が横たわっていました。安らかな気持ちで往生していることがよく分かります。

上人は、お経を読んでねんごろに弔い、大蛇を葬つてやりました。そして、頭の骨はお寺の宝物として厨子に納めました。

その後、日照りが続き、大変な干ばつの年がありました。雨乞いをしようとその頭骨を厨子から出して準備をはじめたところ、てきめん雨となり、しかもどつさり降ったそうです。

だから、大蛇の頭骨は、めったなことでは外に出せないというわけです。

※尋は、縄や水深を測る単位。一尋は、五尺（約一・五メートル）もしくは六尺（約一・八メートル）